

41856

教科書文庫

4
815
41-1927
20000 38378

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

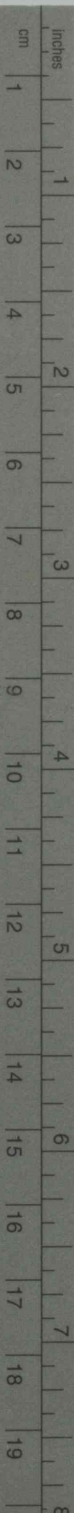


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Y019  
資料室

中日  
本館  
字典  
上卷

教科  
41  
2000



文部省檢定  
昭和二年二月三日

教科書文庫  
4  
815  
41-1927  
2000038378

資料室

375.9  
4019

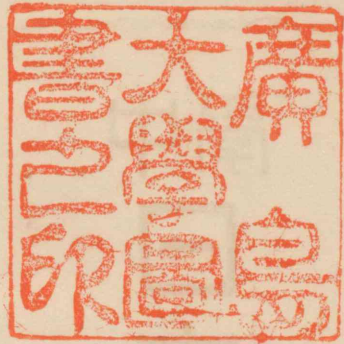
吉田彌平編

中國學  
日本文典

卷上

広島大学図書  
2000038378

東京  
光風館藏版



### 緒言

- 一 本書は中學校國語科に於ける文法の教科書として編纂したものである。
- 一 本書は卷上に於て品詞に關する一般の知識を與へ、卷下に於て更に之を補説し、進んで文章に關する知識を與へる仕組にした。
- 一 まづ平易な實例によつてその中に含まれてゐる國語の法則を歸納的に指示し、更に練習問題によつて演繹的に應用せしめる方針を採つた。
- 一 成るべく文語を本にして口語を對照し、文語法を習得すると共に、一通り口語法に通ぜしめるやうにと務めた。
- 一 本書は用例及び練習問題の選擇に意を用ひ、國定小學讀本、數種

の中學校用國語讀本、並に各高等專門學校入學試驗問題等の中から、最も實用に適切なものを採録した。  
一本書は教授の實驗に基づいて、今回新に修正を加へたものである。

大正十五年八月

# 中學日本文典卷上

## 目次

第一章	品詞	……………	一頁
	名詞	代名詞	動詞
			形容詞
			助動詞
			副詞
	接續詞	感動詞	助詞
第二章	名詞の種類	……………	五
	名詞	數詞	
第三章	代名詞の種類及び用法	……………	八
	人代名詞	物代名詞	
第四章	動詞の活用その一	……………	二三
	四段活用	ら行變格活用	な行變格活用

上二段活用 下二段活用

第五章 動詞の活用その二……………一九

上一段活用 下一段活用 か行變格活用

さ行變格活用 動詞活用の識別法

第六章 動詞の形……………二四

な行變格活用の形

四段活用及びら行變格活用の形

か行さ行兩變格活用の形

上二段活用及び下二段活用の形

上一段活用及び下一段活用の形

第七章 口語動詞の活用及び形……………三

口語四段活用 口語か行變格活用

口語さ行變格活用 口語上一段活用

口語下一段活用

第八章 動詞の自他……………三六

自動詞 他動詞

第九章 動詞の音便……………四〇

い音便 う音便 撥音便 促音便

第十章 動詞の語尾の假名遣……………四六

第十一章 形容詞の活用……………五三

第一類の活用 第二類の活用

第十二章 形容詞の形附音便……………五七

第十三章 助動詞の種類及び活用その一……………六四

時の助動詞 打消の助動詞 推量の助動詞

受身の助動詞 可能の助動詞

第十四章 助動詞の種類及び活用その二……………七一

使役の助動詞 尊敬の助動詞 指定の助動詞

詠歎の助動詞 希望の助動詞 比説の助動詞

第十五章	口語助動詞の種類及び活用	七六
時の助動詞	打消の助動詞	推量の助動詞
受身の助動詞	可能の助動詞	使役の助動詞
尊敬の助動詞	指定の助動詞	希望の助動詞
第十六章	助動詞の形	八二
第十七章	副詞の用法	八八
第十八章	接續詞の種類及び用法	九九
並列累加の接續詞	選擇の接續詞	背反の接續詞
原因理由の接續詞		
第十九章	感動詞の種類及び用法	九六
文の首につく感動詞	文の末につく感動詞	
第二十章	助詞の種類及び用法	九九
體言に添はる助詞		
種々の語に添はる助詞		

活用する語に添はる助詞



中 學 日 本 文 典 卷 上

第 一 章 品 詞

單語は、その性質によつて左の九種に分たれる。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞

副詞 接續詞 感動詞 助詞

これらの一つくを品詞といふ。今左にこれを概説しよう。

名詞 山 川 櫻 鶯 富士山 豊臣秀吉 學問 戰爭 など

のやうに、事物の名をあらはす語をいふ。

代名詞 われ 汝 彼 誰 これ それ こゝ そこ こち

代名詞

名詞

品詞

體言

そち などのやうに、事物を指す語をいふ。

◎名詞及び代名詞は文の主となり題目となる。この二品詞を併せて體言といふ。

動詞

**動詞** 讀む 書く 消ゆ 流る 有り 居り などのやうに、事物の動作又は存在をあらはす語をいふ。

形容詞

**形容詞** 白し 重し 厚し 美し 嬉し 正し などのやうに、事物の性質・情態をあらはす語をいふ。

用言

◎動詞及び形容詞は、名詞・代名詞について何か語る語である。動詞及び形容詞を併せて用言といふ。

助動詞

**助動詞** 「書かず」「書きぬ」「書くべし」「書けり」の ず ぬ べし りのやうに、重に動詞に添うてその意味を助ける語をいふ。

副詞

**副詞** 「必ず來れ」「頗るよし」「大に喜ぶ」「甚だ貴し」の 必ず

接續詞

頗る 大に 甚だ などのやうに、おもに動詞・形容詞などに附うてその意味を限定する語をいふ。

**接續詞** 「山又山」「梅の花及び櫻の花」「文を學び或は武を講ず」の 又 及び 或は などのやうに、語句のつながりに用ひる語をいふ。

感動詞

**感動詞** 「あな嬉し」「やよ待て」「悲しいかな」「行けや、人々」の あな やよ かな や などのやうに、物に感動したときに發する語をいふ。

助詞

**助詞** 「櫻の花」「誰か知らん」「視れども見えず」「よろしくば召上れ」の の か ども ば などのやうに、名詞・代名詞・動詞・形容詞等に添うて下の語句との關係をあらはす語をいふ。

◎助詞は助辭又はテニヲハなどといふこともある。



練習

次の文について、名詞・形容詞・動詞・副詞及び感動詞を擇び出せ。

- 1 父母の恩は山より高く、海より深し。
- 2 嗚呼 忠臣 楠子の墓。
- 3 名も知らぬ 小鳥、しきりに飛びかふ。
- 4 朝には星を戴きて出で行き、夕には月を踏みて歸り來。
- 5 士民はおもに農 或は商を業とし、兼ねて漁獵に従ふ。
- 6 大禹は聖人なれども、寸陰を惜みき。衆人に至りては、當に分陰を惜むべし。(晉の陶侃の語)
- 7 目がさめると、天井があかるい。そとの松の木に五六羽來て騒いでゐる雀の聲。(口)

名詞

第二章 名詞の種類

- 8 勝安芳は大音に「西郷はどこに居ると叫んだ。その聲に吞まれて兵士等は思はず道を開いた。(口)
- 9 あゝ、このけだかい 貴い富士の高嶺こそ 實に我が大日本帝國の姿である。(口)

山川 梅 鶯 机 硯 ビール マッチ 等は、形のある物の名である。富士山 大井川 伊藤博文 乃木希典 などは、地名人名である。春 秋 心 夢 命 などは、形のないものゝ名で

固有名詞

ある。勸 遊 忠 孝 運動 集會 などは、事の名である。すべて事物の名をいふ語を名詞といふ。

◎富士山 乃木希典 のやうな地名・人名は、その山、その人に限つた名で、他の山、他の人には通用せぬ。之を固有名詞といふ。

數詞

一 二 三 四 などは、數量をあらはす語で、第五 六 七 七つめ などは、順序をあらはす語である。かやうに數量又は順序をはつきりとあらはす語を數詞といふ。數詞は名詞の一種である。

◎廣く數量をあらはすに 一個 二個 といひ、人の數をあらはすに

三人 四人 といひ、鳥の數をあらはすに 五羽 六羽 といひ、獸の數をあらはすに 九頭 十頭 といひ、長い物の數をあらはすに 一本 二本 といひ、平たいもの、數をあらはすに 三枚 四枚 とい

ひ、二つ以上の同じものを一纏にしてあらはすに 「一對」 「二組」 「三ダ」 「一ス」 などといふのも、亦數詞である。一尺 二呎 三升 四オンス 五匁 などのやうに度量衡をあらはす語、六圓 七弗 などのやうに金額をあらはす語も、亦數詞である。

練習

次の文から名詞を擇び出し、なほ固有名詞・數詞等があつたらそれをも示せ。(口)

- 1 私 は 家 の はいり口 の 二本 の 棕櫚 の 根方 に、紅い 一輪 の アネモネ の 花 を も 見 つ け た。(口) (北原白秋「季節の窓」)
- 2 昨 年 の 今日 は、ちやうど 今 頃、巴里 から 倫敦 へ 向ふ 途 中、海 峽 を 過 ぎ、ケント州 の 櫻桃杏梨 今 を 盛 と 咲 亂 れ た 中 を 走 つ て ゐ た 頃 だ である。(口) (杉村廣太郎「潮の岬」)
- 3 十 で 神童 十五 で 才子 二十 過 ぎ て は 唯 の 人。(口)

4 凡そ時間を大切に守るは、勤勉の習慣を生じ、責任をつくし、義務を重んずる所以にして、身を立つる基なり。フツシングツ、ゼ、フロント

5 太田道灌は初め左衛門大夫持資といひ、上杉定正の家臣なり。幼時より氣力盛にして、人に屈せず、武道を好み、末恐しき少年よと

うはさせられぬ。(國定小學讀本)

### 第三章 代名詞の種類及び用法

代名詞の種類  
人代名詞  
物代名詞

われ 汝 彼 誰 のやうに、人を指す代名詞を人代名詞といひ、  
これ それ かれ いづれ のやうに、事物を指し、こゝ、そこ  
かしこ いづこ のやうに、場所を指し、こち そち あち い  
づち のやうに、方向を指す代名詞をすべて物代名詞といふ。

自稱  
對稱  
他稱  
不定稱

#### 人代名詞の稱

人代名詞は、話す人と指される人との關係によつて、自稱、對稱、他稱、不定稱の四種に分れる。

自稱とは、余 われ おのれ 私 僕 のやうに、話す人自らを指す代名詞である。

對稱とは、汝 君 あなた(口) おまへ(口) のやうに、相手を目指す代名詞である。

他稱とは、彼 あれ あの人(口) のやうに、自分でも相手でもない外の人即ち第三者を指す代名詞である。

不定稱とは、誰 どなた(口) のやうに、それと定めぬ人、又はわからぬ人を指す代名詞である。

◎自稱の あのれ われ は、時としてあのれにくき奴「われらに負けるものかなどのやうに、對稱に用ひることがある。

複数の人代名詞

近稱

中稱

遠稱

◎君 卿 を對稱に、私 僕 を自稱に用ひるなどは、名詞を代名詞に轉用したのである。

◎われ／＼ 君たち あなたがた かれら などいへば、指される人が二人以上であることを示す。即ち複数の人代名詞である。

物代名詞の稱

物代名詞は、話す人と指されるものとの關係によつて、之を近稱、中稱、遠稱、不定稱の四種に分ける。

近稱とは、こ、これ、こゝ、こなた、こち口、こつち、こちら、の

やうに、近くにある事物、地位、方向を指す代名詞である。

中稱とは、そ、それ、そこ、そなた、そち(口)、そつち、そちら、の

やうに、稍離れた事物、地位、方向を指す代名詞である。

遠稱とは、か、かれ、あ、あれ、あそこ、かしこ、かなた、あ、

なた、あち(口)、あつち、あちら、のやうに、離れてある事物、地位、方向

不定稱

を指す代名詞である。

不定稱とは、いづれ(口)、どれ、なに、いづこ(口)、どこ、いづか、た、いづち(口)、どつち、どちら、のやうに、それと定めぬ、又は分らぬ事物、地位、方向を指す代名詞である。

◎こ、そ、は、獨立しても用ひ、又、この、その、などのやうに、助詞の、と續けても用ひる。か、あ、は、かの、あの、などのやうに、おもに助詞の、と續けて用ひる。

◎こなた、こち、は、自稱の人代名詞に、そこ、そなた、あなた、そち、は、對稱の人代名詞に、どなた、は、不定稱の人代名詞に轉用することがある。

練習

次の文から代名詞を擇び出し、且、その種類並に稱を示せ。

1 これはこゝに、それはそこに、かれはかしこに、そのまゝおけ。  
 2 あそこにある本はあなたの本でございませうか。いゝえ、あの本は私の本ではございませぬ。あれは、多分太郎さんの本でございませう。(口)

3 この天地を我が物顔に啼きさへづつてゐるのは小鳥だ。何といふいゝ聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますとなほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。(口)

(高濱虚子「比叡の鳥」)

4 汝は誰ぞ。そを何處にか負ひてゆく。「聞召せ、背負ひ奉るは奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。」(森鷗外「乃木將軍」)

5 釜山の浦の秋ふけて、空もしぐる、夕間暮、波路遙かに帆を揚げて、

汝と今や別るなり。知遇の恩に身を捨て、四百餘州をわが駒の蹄に蹴んと勇みしも、覺めてはかなき夢なれや。我を知りにし太閤の世になき後は誰が爲に、千里の外に戈執りて、異境の山にいくさせん。(天町桂月「八道の山」)

6 明治天皇は、われら國民に勅語を下し賜ひて、朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ威厥徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。とのたまへり。

### 第四章 動詞の活用 その一

動詞はその形が色々に變る。左の例を見よ。

咲さかか (あ段) …… 花はなささかず。  
 咲さきき (う段) …… 花はなちちぬ。

語幹  
語尾  
活用

四段活用

く (う段) … 花さく。  
け (え段) … 早くさけ。

右の例のさのやうに變らぬ部分を語幹といひ、かきくけのやうに變る部分を語尾といひ、その變ることを活用といふ。動詞の活用には、四段・ら行變格な行變格・上二段・下二段・上一段・下一段・か行變格さ行變格の九種ある。

四段活用 語尾が五十音圖の あ い う え 四段に活用するものをいふ。前例の 咲く がこれにあたる。

書く 押す 勝つ 思ふ 積む 釣る 漕ぐ 飛ぶ などは、皆此の活用である。

◎此等の動詞は、その活用の行によつて、か行四段活用・さ行四段活用などといふ。  
◎四段に活用するのは、か ぎ た は ま ら が ば の八行で

ら行變格活用

な行變格活用

ある。

◎あらゆる動詞の中で、四段活用に屬するものが最も多し。

ら行變格活用 ら行の四段に活用する動詞のうち、有り 居り

侍り の三語をいふ。

有<sup>有</sup>  
ら (あ段) … 望あらば言へ。  
り (い段) … 天に日月あり。  
る (う段) … 能ある鷹は爪をかく。  
れ (え段) … 彼は才あれど徳なし。

◎ら行變格の動詞といふわけは、通常のら行四段の動詞に似てはゐるが、文意の切れるところに左の相違があるからである。

少年魚を釣る。 るで言ひ切る。 ら行四段。  
こゝに本あり。 りで言ひ切る。 ら行變格。

な行變格活用 五十音圖中、な行の あ い う え 四段に活

用し、且、そのう段の音に なるれの添はるものをいふ。

な (あ段) ……夜更くれども往ならず。

に (い段) ……夜更けて往にたり。

往 (う段) ……夜更けて往ぬ。

ぬ (え段) ……夜更くれども往ぬることなし。

ぬれ (え段) ……往ぬれども敢へて止めず。

ぬ (え段) ……夜の更けぬうちに往ぬ。

◎な行變格は、う段の音に なるれの添はる點が、通常の四段活用とちがふのである。

◎な行變格は、死ぬ 往ぬ の二語だけである。

上二段活用

上二段活用

五十音圖中、い う の二段に活用し、且、そのう段

の音に なるれの添はるものをいふ。

き (い段) ……彼は未だ起きさず。

下二段活用

下二段活用

五十音圖中、え う の二段に活用し、且、そのう段

の音に なるれの添はるものをいふ。

げ (え段) ……雞、曉を告げぬ。

告 (う段) ……雞、曉を告ぐ。

ぐる (え段) ……雞の曉を告ぐる聲、勇まし。

ぐれ (え段) ……雞、曉を告ぐれば、必ず起く。

起 (う段) ……朝は、早く起く。

くる (え段) ……遅く起くことなかれ。

くれ (え段) ……早く起くれば、心地よし。

生く 朽つ 用ふ 試む 報ゆ 懲る 過ぐ 恥づ 錆ぶ な

どは、何れも此の活用である。

◎此の段に活用するのは、か た は ま や ら が だ ば の九行である。

得 避く 馳す 捨つ 尋ぬ 教ふ 眺む 覺ゆ 流る 植う  
遂ぐ 交ず 出づ 述ぶ などは、皆この活用である。

◎下二段活用の動詞は、五十音圖のすべての行にある。

◎得 は、その語全體が變化する。

◎下二段活用の動詞の數は、四段活用の動詞につぐ。

練習

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

1 大空にそびえて見ゆる高嶺にも、登れば登る道はありけり。

(明治天皇御製)

2 月落ち烏啼きて、霜天に滿つ。(唐の張繼)

3 かばねは朽ちて骨となり又は折れて霜結ぶ。

4 恥をしのびて故郷に歸るも後に死ななため、主君の家の行末を思へば重き命なり。(天町桂月「八道の山」)

上一段活用

上一段活用

五十音圖中、い の一段にのみ活用し、且、これに

第五章 動詞の活用 その二

5 のぼらば瀧につくらん、岩きりとほしゆく水の流れの岸に小屋  
見えて、あやふくかゝる水車。たゞかりそめの板葺にのせたる石  
も苔むしぬ。さゝぬ窓より見入るれば、守りたる人はまだ若し。

(尾上柴舟「水車」)

6 普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれ  
が學業などその人に及ばずとも、猶強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を  
下げざるが習なれども、徳量ある尊敬は、いかでか眞に敬ふべき學  
識ある人に向ひて頭をたるゝを厭ふべき、喜びてそれが門下生と  
なれり。(幸田露伴「伊能忠敬」)



る れの添はるものをいふ。

「見」みる……山をみる。

「見」みる……山をみれば登りたしと思ふ。

上一段活用の動詞は 着る 似る 煮る 干る 見る (惟みる 願みる 鑑みる 試みる) 射る 鑄る 居る 用ゐる 率ゐる ぐらゐるものである。

○上一段に活用するのは、か な は ま や わ の六行である。

○試みる は 試む、用ゐる は 用ふ ともいつて上二段にも活用する。

下一段活用

下一段活用 五十音圖中、え の一段にのみ活用し、且、これに る れの添はるものをいふ。

「蹴」ける……ボールをける。  
「蹴」ける……ボールをける。  
「蹴」ける……ボールをけれどもゴールに入らず。

○下一段活用は、蹴る の 語だけである。

か行變格活用

か行變格活用 語尾が五十音圖中、か行の おい う 三段に 活用し、且、そのう段の音に る れの添はるものをいふ。

こ (お段)……秋未だこず。

き (い段)……秋きぬ。

「來」く (う段)……秋く。

くる……くる秋を待つ。

くれ……秋くれれば木の葉散る。

さ行變格活用

さ行變格活用 語尾が五十音圖中、さ行の えい う 三段に

活用し且、そのう段の音に るれ の添はるものをいふ。

せ (え段) …… 遠足をせん。  
 し (い段) …… 遠足をしたり。  
 爲す (う段) …… 遠足をす。

する …… 遠足をする人あり。  
 すれ …… 遠足をすれども汽車には乗らず。

◎さ行變格は、す(爲) おはす(在す) の二語だけである。

しかし、此の す という動詞は、心す 罪す 論ず 運動す 勉強す 全くす 正しくす などのやうに、名詞・形容詞などと結びついて、熟語の動詞をいくらも作る。

動詞活用の識別法

上一段・下一段の兩活用と變格の諸活用とは、語数が少いから、その動詞を記憶することがたやすく出来る。其の他は左の識別法によるがよい。

四段活用の識別

上二段活用の識別

下二段活用の識別

(イ) 四段活用 書かず 言はず のやうに、あ段の語尾に ず

(ロ) 上二段活用 起きず 懲りず のやうに、い段の語尾に ず

(ハ) 下二段活用 聞えず 寝ねず のやうに、え段の語尾に ず

練習

次の文から動詞を擇み出し、且、その活用を示せ。

- 1 治にゐて亂を忘れず。(易經)
- 2 うはさをすれば影がさす。(諺)
- 3 強者存して弱者滅び、強國榮えて弱國衰ふ。
- 4 春は來れども、花咲かず。
- 5 能はざるにあらずせざるなり。(孟子)

6 見渡せば、眺むれば、見れば須磨の秋。(芭蕉)

7 今日カは來カな、明日アこよ。

8 その將シを獲トんには、その馬ウを射シよ。

9 おきふしも寐スても覺トめてもおもひなば立ツてし心ココロのとほらざらめや。(佐久良東雄)

10 黒烟ク立ちのぼる中に火氣ヒ見ミえて烈シき音ネの聞キえたる、いと勇ユウまし。事コトあらん日は、親オヤ妻子シをも顧シみず、君キミのため命イデをすて、戦タケひなんとおもふに、いとたのもしくはあれど、又またいたはしくて、胸ムネもふたがるこゝちぞする。(昭憲皇太后「水戸のみゆき」)

11 そのかみ、金殿キ・玉樓トウを望ミみて、うちつゞく都ミヤ大路ヂを、大宮オホミヤ人の櫻サクラかざし、紅葉もみぢかざして往來ウラエしけむ、今イマにして思オモへば、唯一場ヒトツバサの夢ユメに過ぎず。

(國定小學讀本)

### 第六章 動詞の形

#### な行變格の形

動詞の變化には、それ／＼用ひ方のきまりがある。これを形といふ。

#### な行變格活用

な……………われ將に王事に死なんとす。

に……………一門悉く王事に死に果てたり。

ぬ……………潔く王事に死ぬ。

ぬ……………王事に死ぬる武士多し。

ぬれ……………死ぬれば萬事休す。

ぬ……………潔く王事に死ぬ。

死な は、多く事の未だ然らざることを假かにいふ場合に用ひるから、未然形といひ、死に は、多く用言に連なる場合に用ひるから、連用形といひ、死ぬ は、多く文句の切れる場合に用ひるから、終形といひ、死ぬる は、多く體言に連なる場合に用ひるから、連

未然形  
連用形  
終止形

連體形  
已然形  
命令形

體形といひ、死ぬれは、多く或條件の已に成立したことをいふ場合に用ひるから、已然形といひ、死ぬれは、命令希望の意を示すに用ひるから、命令形といふ。

◎六形の名稱は、その用ひ方の一部について便宜上名づけたもので、各段の用ひ方がこれで盡きてゐるのではない。甲も死に、乙も死ぬ。の死に、は連用形であるが、言ひ方を中止して居るのみで、用言に連続せず、「死ぬべし。」の死ぬれは終止形であるが、終止しないで、べしに連なるやうなものである。

四段及びら行  
變格の形

四段活用及びら行變格活用の形

ら	り	る	る
〔未然〕雨降らんとす。	〔連用〕雨降りしきる。	〔終止〕雨降る。	〔連體〕雨降ることあり。

ら	り	り	る
〔未然〕功有らば、賞せられん。	〔連用〕功有りて、賞せらる。	〔終止〕旅順の役に功有り。	〔連體〕功有るものは、賞せらる。

か行さ行兩變格の形

か行さ行兩變格活用の形

◎四段活用の動詞は終止形と連體形とが同じ語尾で、已然形と命令形とも、亦同じ語尾である。  
◎ら行變格活用の動詞は、連用形と終止形とが同じ語尾で、已然形と命令形とも、亦同じ語尾である。

こ	き	く	くる	くれ	こよ
〔未然〕春は、やがてこん。	〔連用〕春きぬ。	〔終止〕春く。	〔連體〕くる春を待つ。	〔已然〕春くれど、花咲かず。	〔命令〕春こよ。

せ	し	す	する	すれ	せよ
〔未然〕雪合戦をせば、面白からん。	〔連用〕雪合戦をしはじむ。	〔終止〕雪合戦をす。	〔連體〕雪合戦をする子供あり。	〔已然〕雪合戦をすれば、面白し。	〔命令〕雪合戦をせよ。

上二段及び下二段の形

◎か行さ行の兩變格及びな行變格の動詞は、各形ともその語尾がちがふ。  
◎か行さ行の兩變格の命令形には、何れも よ を含む。

上二段活用及び下二段活用の形

き (未然) 未だ起きず。

き (連用) 早く起き、遅く寝ぬ。

く (終止) 早く起く。

起

くる (連體) 遅く起くる事なし。

くれ (已然) 早く起くれば、快し。

きよ (命令) 早く起きよ。

け (未然) 恩を受けば、必ず報いよ。

け (連用) 恩を受けたり。

く (終止) 恩を受く。

受

くる (連體) 恩を受くる事あり。

くれ (已然) 恩を受くれば、必ず報ゆ。

けよ (命令) 請ふ、余の寸志を受けよ。

◎上二段活用及び下二段活用の動詞は、未然形と連用形とが同じ語尾である。又命令形には何れも よ を含む。

上二段活用及び下二段活用の形

み (未然) 花をみん。

け (未然) ボールをけず。

み (連用) 花をみいだせり。

みる (終止) 花をみる。

みる (連體) 花をみる人あり。

みれ (已然) 花をみれば、心慰む。

みよ (命令) 花をみよ。

け (連用) ボールをけたり。

ける (終止) ボールをける。

ける (連體) ボールをける人あり。

けれ (已然) ボールをけれども、あたらず。

けよ (命令) ボールをけよ。

◎上二段活用及び下二段活用は、未然形と連用形とが同じ語尾で、終止形と連體形とも、亦同じ語尾である。又命令形には何れも よ を含む。

練習

次の文の誤を正せ。

1 約束を違ふ時は、信用を失ふべし。

2 何事も自らして、他人に任すことなし。

3 足の疲るを覺えず。

4 人の言ひ傳ふ所、此の如し。

5 家門を過ぎれども、立寄らず。

6 死ぬまで奮闘せり。  
次の文から動詞を擇び出し、且その活用及び形を示せ。

1 来るものは拒まず、去るものは追はず。

2 夙に起き、夜に寝ねて、家業を勉勵す。

3 なせばなる、なさねばならず、成るわざをならずとすつる人のはかなさ。(平田篤胤)

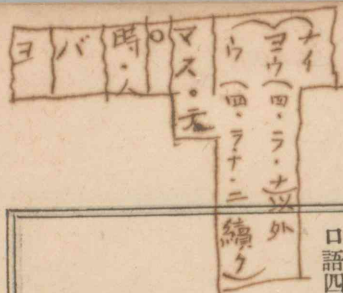
4 心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。(大學)

5 人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし。(南洲遺訓)

6 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路窮るが如くにしてまた開く。かくして島轉じ海廻りて、其の盡くる所を知らず。

7 屋後に一株の銀杏あり。秋深くて満樹黄金よりも黄なり。夜

(國定小學讀本)



口語四段活用

### 第七章 口語動詞の活用及び形

口語の動詞は文語の動詞より其の活用がよほど簡單である。その種類も四段・か行變格・さ行變格・上一段・下一段の五種に過ぎぬ。

口語四段活用 文語の四段・ら行變格・な行變格の活用は、口語ではすべて四段活用となる。

口	文	活用	語幹	未然	連用	終止	連體	已然(口)	命令
四	成	ら	ら	り	る	る	れ	れ	れ

半夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庭も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふなる錦を我は庭にしきつめぬ。

(徳富健次郎「我が家の富」)

口	文	口	文
四	變	四	變
段	格	段	格
	行		行
死		有	
な	な	ら	ら
に	に	り	り
ぬ	ぬ	る	る
ぬ	ぬ	る	る
ね	ね	れ	れ
ね	ね	れ	れ

人あり——人がある  
 死ぬる人——死ぬる人  
 死ぬれば——死ぬれば

即ち、文語ら行變格の終止形 有り は、口語では、有る となつて四段活用に一致し、な行變格の連體形 死ぬる は、死ぬ となり、已然形 死ぬれ は、假定形 死ぬ と なつて、是亦四段活用に一致する。

◎ 文語動詞の已然形に當るところは、口語動詞では總べて假定の條件を示す意味となるから、假定形と名づける。

⑥ 口語か行變格活用

となり、命令形 こよ は、こい となる。

文語の 終止形 く は、口語では、くる

假定形

口語か行變格活用

口	文	活
變	か	用
格	行	語
	「來	幹
こ	こ	未
き	き	然
くる	く	連
くる	くる	用
くれ	くれ	終
こよ	こよ	止
		連
		體
		已然(文)
		假定(口)
		命令

人く——人がくる  
 早くこよ——早くこい  
 特別

即ち口語では、か行變格活用も、終止形と連體形とが共に同じ語尾になる。

口語さ行變格活用

未然形と終止形とが、文語さ行變格活用の動

詞と少しちがふ。

口	文	活
變	さ	用
格	行	語
	「爲	幹
し	せ	未
し	し	然
する	す	連
する	する	用
すれ	すれ	終
せよ	せよ	止
		連
		體
		已然(文)
		假定(口)
		命令

仕事をせず——仕事をしない  
 仕事をす——仕事をす

即ち文語さ行變格の未然形 せ は、口語では、せ 又は し

口語上一段活用

となり終止形 ずは、する、となる。

◎口語さ行變格の命令形のせよは、しろせいといふ處もある。

口語上一段活用 文語の上一段上二段の動詞は、口語では、すべて上一段活用となる。

口	文	口	文	活用語幹未然連用終止連體	已然(文) 假定(口) 命令
上二段	上二段	上一段	上一段		
起	起	見	見	み	み
き	き	み	み	みる	みる
き	き	みる	みる	みる	みる
き	く	みる	みる	みる	みる
き	くる	みる	みる	みる	みる
き	くれ	みれ	みれ	みれ	みれ
き	きよ	みよ	みよ	みよ	みよ
き	きよ	みよ	みよ	みよ	みよ

早く起く、早く起きる  
早く起くる人、早く起きる人  
早く起くれば、早く起きれば

即ち文語上二段活用の終止形 起く、連體形 起くる は、口語では共に 起きる となり、已然形 起くれ は、假定形 起きれ となつて、全く上一段活用となる。

口語下一段活用

◎文語の終止形 起く を、口語で 起くる 連體形 起くる 已然形 起くれ を、口語でもそのまま、起くる 起くれ といふ地方もあるが、普通には用ひない。  
◎口語上一段の命令形を、見ろ 見い、起さろ 起さい などといふところもある。

口語下一段活用 文語の下一段下二段の動詞は、口語では、すべて下一段活用となる。

口	文	口	文	活用語幹未然連用終止連體	已然(文) 假定(口) 命令
下一段	下一段	下一段	下一段		
受	蹴	蹴	蹴	け	け
け	け	け	け	ける	ける
け	け	ける	ける	ける	ける
ける	く	ける	ける	ける	ける
ける	くる	ける	ける	ける	ける
ける	くれ	けれ	けれ	けれ	けれ
けよ	けよ	けよ	けよ	けよ	けよ

教を受く、教を受ける  
教を受くる人、教を受ける人  
教を受くれば、教を受ければ



即ち文語下二段活用の終止形 受く、連體形 受くる は、口語  
では共に 受ける となり、已然形 受くれ は、受けれ と  
なつて、全く下一段活用となる。

◎文語の終止形 受く を、口語で 受くる、連體形 受くる 已然形  
受くれ を、そのまま 受くる 受くれ といふ地方もあるが、普通に  
は用ひない。

◎口語下一段の命令形を、蹴い 蹴ろ 受けい 受けろ などといふ  
ところもある。

◎口語「蹴る」は、蹴ら 蹴り 蹴る 蹴れ とら行四段活用のやう  
にはたらかせることもある。

練習

次の文から動詞を選び出し、且、その活用及び形を示せ。

1 一艦でも出て來たら目に物見せてくれるぞ。(口)

2 スペアロー君は棒を捧げて走つた。踏切つた。棒は高々と輕快  
なス君の體を宙に浮かせる。瞬間、全身は巧みにバーの障壁を越  
えて、白雲を踏むやうな姿をしつゝ、ス君は地上に落ちた。新記録。  
拍子が雷の如く起る。(口)(土岐善麿「スポーツの世界」)

3 ひつそりとした天橋立に人籟絶えて、唯どこからともなく、ざあざ  
あといふ響がする。松風か。否、足下の松影は、濃い墨で描かれた  
やうに少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐め  
る響に外ならぬのである。其の響にひかれて汀に出て見る。そ  
の處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰をかける。月下  
にほの白く眠る與謝の海。その懐には壁のやうな月を抱き、寐息  
かとはかり、ざぶり又ざぶりと白砂にこぼれる漣は、まるで眞珠を  
こぼすやう。(口)(徳富健次郎「月の天橋」)

### 第八章 動詞の自他

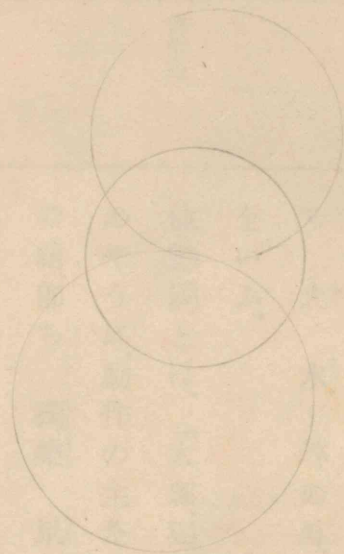
自動詞

動詞はその性質上、之を自動詞と他動詞とに分ける。自動詞とは、「火消ゆ」「水流る」の消ゆ流るのやうに、動作の主たる語、即ち火水等の外、別に動作を受ける目的の語を要しない動詞をいふ。

他動詞

他動詞とは、「太郎獨樂を廻す」「次郎扇を揚ぐ」の廻す揚ぐのやうに、動作の主たる太郎次郎の外に、動作を受ける目的の語、即ち獨樂扇等を加へて、文意の始めて通ずる動詞をいふ。

◎他動詞は多く、何々をといふ語を受ける。但し、「文(を)讀む窓」「馬(を)繋ぐべからず」のやうに、をを略することもある。又、稀には「空を



渡る。「門を|入る。」の 渡る 入る のやうに、自動詞でありながらを|  
を受けるものもある。

動詞には、自動詞のみで之に對する他動詞のないものがあり、他動  
詞のみで之に對する自動詞のないものがある。又、自他共にその  
語形の全く同じものもあり、自他によつてその活用のちがふもの  
もある。

自動詞ばかり  
の動詞

自動詞ばかりの動詞

眠る 有り 死ぬ 来る など。

他動詞ばかり  
の動詞

他動詞ばかりの動詞

打つ 殺す 投ぐ 送る など。

自他同形の動  
詞

自他同形の動詞

吹く(四)か (段)行……………  
風吹く。(自)  
牧童笛を吹く。(他)

詞のもとが同じで自他の活用がちがふ動詞

閉づ(上だ段行)

門閉づ。(自)  
下女門閉づ。(他)

垂る(下ら段行)

尾垂る。(自)  
犬尾垂る。(他)

語のもとが同じで、自他の活用がちがふ動詞

育つ(四た段行)

子育つ。(自)

育つ(下た段行)

母子を育つ。(他)

足る(四ら段行)

衣食足る。(自)

足す(四さ段行)

仁君民の衣食足す。(他)

見ゆ(下や段行)

月見ゆ。(自)

見る(上ま段行)

少年月見る。(他)

冷ゆ(下や段行)

西瓜冷ゆ。(自)

冷す(四さ段行)

下女西瓜冷す。(他)

盡く(上か段行)

糧食盡く。(自)

盡す(四さ段行)

兵士糧食盡す。(他)

落つ(上た段行)

木の葉落つ。(自)

落す(四さ段行)

風木の葉落す。(他)

練習

次の文から動詞を擇み出し、且、その自他を分けよ。

1 人若うしては學ばんことを願ひ老いては教へんことを欲す。(天  
町桂月―乃木將軍)

2 おいと聲をかける。土間の隅に引寄せてある白の上にふくれて  
居た雞が驚いて目をさます。くゝゝゝと騒ぎ出す。

(口) (夏目漱石―峠の茶屋)

3 花咲く春のあけぼのを、はやとく起きて見よかしと、鳴く鶯も心して、人の夢をぞさましける。

◎ 次の動詞に自他の誤があつたら、それを正せ。

- 1 試験を終らば、一先歸らん。
- 2 庭の趣は、年と共に加へたり。
- 3 日は暮れ、夜を明かす。
- 4 何事をも爲さで、一日を過すけり。
- 5 船を泛びて、月を中流に賞す。
- 6 不毛の地開けて、樹木を植う。
- 7 塵積つて、山をなす。

次の諸動詞の自他を分けよ。又活用によつて自他のちがふものがあつたら、一々それを示せ。

解く。照る。寄す。生ゆ。立つ。倒る。起す。及す。伸ぶ。

### 第九章 動詞の音便

動詞の音便

四段に活用する動詞の連用形が て (口語では、たてたり) につづく時には、發音の便宜によつて、他の音に轉ずることがある。之を動詞の音便といふ。

動詞の音便は、左の如く四種ある。

い音便

か行及びが行四段活用の連用形の き ぎ が、い に轉ずるものをいふ。

開きて……………開いて (文)

開い……………開いて (口)

開いて……………開いて (口)

う音便

脱ぎて……………脱いで (文)  
脱いで (口)

○ぎ がい音便に轉ずるときは、次に來る たてたりは、だで

指しり と濁る。

○差して が 差いて となるやうに稀には、さ行四段活用の語尾の

し が い に轉ずることもある。

○口語で「差いて」「起いて」などといふ處もあるが、用ひないがよい。

○聞ひて「脱むで」などと書き誤つてはならぬ。

う音便 は行四段活用の連用形の ひ が、 う に轉ずるもの

をいふ。

逢ひて……………逢うて (文)  
逢う (口)

逢う (口)

撥音便

○逢ふて などと書き誤つてはならぬ。

撥音便 な行變格及びひば行ま行四段活用動詞の連用形の に

び み が、撥音 ん に轉ずるものをいふ。

死にて……………死んで (文)  
死んで (口)

死んで (口)

呼びて……………呼んで (文)  
呼んで (口)

呼んで (口)

讀みて……………讀んで (文)  
讀んで (口)

讀んで (口)

○に び み が撥音便に轉ずるときには、次に來る たてたり

促音便

は、だ<sup>レ</sup>で、だ<sup>レ</sup>り と濁る。

**促音便** た行は行ら行四段活用及びら行變格活用の連用形のち<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>りが促音に轉ずるものをいふ。

打ちて……………  
打つて (文)  
打つ (口)

從ひて……………  
從つて (文)  
從つ (口)

有<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>りて……………  
有<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>つて (文)  
有<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>つ (口)

○は行四段活用の連用形は、「買<sup>レ</sup>うて」「買<sup>レ</sup>つて」のやうに、う音便にも促

音便にもなる。

練習

次の文の中にある動詞の音便を指摘し、且、その本音を示せ。

- 1 正岡子規はすべてのものに健啖であるなかに、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は、大の好物であつた。(口)高濱虚子「柿二つ」
- 2 お、樂しげに、軽らかに、みんなだとび上つて、障害物を越えたり、輪を巻いて踊つたり、急に輪をほどいて走り出したり、狂ふやうに樂しく興奮して、先へくと笛を吹いて走つてゆく水の精よ。(口)千家元磨「川」

次の文の中の動詞をなるたけ音便に改めよ。

- 1 みづから請ひて義勇兵となる。
- 2 勝ちて胃の緒をしめよ。(謔)
- 3 凝りては百鍊の鐵となり、銳利蓋を斷つべし。(藤田東湖「正氣歌」)
- 4 進みては忠を盡さんことを思ひ退きては過を補はんことを思ふ。

(孝經)

5 朝には星を戴きて出で行き、夕には月を踏みて歸り來。  
次の文の假名遣に誤があつたら、それを正せ。

- 1 溪に沿ふて進む。
- 2 敵は終に國を割ひて和を請ふた。(口)
- 3 つしむで貴君の健康を祝せん。
- 4 仰ひて天に愧ぢず。(孟子)
- 5 這う這うの體で逃げ込むだ。(口)
- 6 強めて飲食をすゝめるものでない。(口)

### 第十章 動詞の語尾の假名遣

思ひて 報いて 聞いて 率ゐて  
 與ふ 思ふ 思うて

動詞の語尾の假名遣

誣ふ 老ゆ 餓う  
 答へず 見えず 植ゑず  
 出づ 交ず

右の例のやうに、動詞の語尾の ひ い ん ふ う ふ ゆ  
 う、へ え ゑ づ などの假名は、發音が同じやうに聞えるため、互に紛れ易い。

動詞の語尾の假名遣を正しくするには、次の諸法によるがよい。  
 一、その動詞の活用を明かにすること。

例へば、堪 がは行の下二段、絶 がや行の下二段に活用することを  
 知つたならば、すぐ 堪え 堪ゆ は、堪へ 堪ふ の誤であることを、  
 絶へ 絶ふ は、絶え 絶ゆ の誤であることを知る類である。

二、少い方の活用並に假名遣を記憶して、他の多い方を推定すること



と。

例へば、交まず がざ行下二段活用の唯一の動詞であることを記憶すればその他の 出でづ 詣よづ 撫なづ 秀しゆづ ぬきんづ 等は、何れも皆だ行下二段活用であることが推定される類である。

三、本来の活用と音便との別を明かにすること。

例へば、問とひて の 問とひ は、本来のは行四段活用で、説いひて の 説いひ は、か行四段活用 説いき のい音便であることを知つたならば、問とひて 説いひて の假名遣を誤ることのない類である。

今語尾の假名遣を誤り易い動詞の重なるものを左に示さう。

四段活用

四段活用には、は行があつて、わ行はない。

買かふ 思おふ 問とふ 叶かふ などのやうにわ行四段に聞えるものは、一切は行四段活用である。

上二段活用

此の活用で誤り易いのは、だ行は行や行の三活用で

ある。今その重なるものを左に示さう。

- だ行上二段………怖おそ・綴と閉と恥は攀よちづ づる づれ
- ◎ざ行上二段活用はなす。
- は行上二段………生な戀こ強こ誣し用しひふ ふる ふれ
- ◎や行上二段………老お悔く報は酬ういゆ ゆる ゆれ
- ◎わ行上二段活用はなす。

下二段活用

此の活用で誤り易いのは、あ行さ行だ行は行や行わ行の諸活用である。今その重なるものを左に示さう。

- あ行下二段………得ええ える うれ
- ◎ざ行下二段………交まぜ ずる ずれ
- だ行下二段………出い撫な擢ひ擢ひ秀しゆ詣よ詣よ詣よ愛あで づる づれ
- や行下二段………癒い覺かく消け聞き肥こ越こ凍こえ づる づれ
- 牙さ榮さ聳さ絶た斷た生は冷ひえ づる づれ
- 殖ふ吠は謁ま見み燃も萌もえ づる づれ

○わ行下二段……〔植栽・餓・飢・据〕  
 ◎下二段活用の中、は行 は、や行 わ行 に比べればその数が頗る多くて、八十餘語ある。故に、や行 わ行 に屬する重な語を記憶し、その他は大抵 は行 だと心得るがよい。

練習

次の文に假名遣の誤があつたら、之を正せ。

- 1 笑ふて答えず。
- 2 百年の計は人を樹ゆるに如くはなし。(管子)
- 3 恩に報うることを知らぬ人は、人非人なり。
- 4 負ふた子に教えられ、淺瀬を渡る。(口)
- 5 汝自ら爲し得ざることは、之を人に強ゆべからず。
- 6 夏休み家戀い來れば、坂を出でて家の森見ゆ、わが家の森。  
 艱苦に堪えて年月を過し、絶えて憂悶の色なし。
- 8 恥じて能く改め、覺へて忘れず。

形容詞の活用

高たかく

山高く、水深し。  
山高し。

第十一章 形容詞の活用

- 9 饑うを凍こえようとも、武士の體面たいめんを傷けまい。(口)
- 10 我が言いう事ことを用もちいずば、後に悔くふとも及およばじ。
- 11 砲臺たうだいを構かまえ、大砲たいぱうを据すへつく。
- 12 夜ふけ、月つき牙がへて、犬いぬの吠わゆる聲こゑ、しきりに聞きえけり。
- 13 名物の地曳歌ぢひきうたはこれです。彼一句、此一句歌つては曳ひき、曳ひいては歌うた。抑おさえて揚あげて、屈かんで、伸のびて、右の片足ひだりをひよいと上げて、拍うちも調子てうしも面白く、網あみは段々上つて來る。もう網あみが見みへて來きました。もう網あみの中なかはさつきから鱒ますや鯖さばの青光あざり、白光あざりがばた／＼  
 ばた／＼ごつたかえしてゐます。(口) (徳富健次郎「新春」)

語幹  
語尾  
活用

第一類の形容  
詞

右のごとく、形容詞も亦その語の下部が變化する。而して たか  
のやうに變化しない部分を語幹といひ、く し き けれ の  
やうに變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用とい  
ふ。

形容詞の活用には、左の別がある。

第一類の活用

し き けれ と活用するもの。 高し 暑し 重し などのやうに、語尾が く

語幹例	高 暑 重	語	尾
	く		
	し		
	き		
	けれ		

第二類の形容  
詞

口語形容詞の  
活用

第二類の活用 美し 同じ などのやうに、語尾が く き け  
れ とだけ活用し、し の語尾を缺くもの。

語幹例	美 同	語	尾
	じし		
	く		
	〇		
	き		
	けれ		

◎第二類の形容詞は、語幹の最後の音が し 又は じ である。この  
し 又は じ は、語幹の一部であるが、特に送假名として書きあら  
はす例になつてゐる。

口語では、形容詞は第一類と第二類との別なく、左の表のやうに  
く い けれ と活用する。

語幹例	高 美	語	尾
	し		
	く		
	い		
	けれ		

練習

次の文から形容詞を選び出し、且その活用を示せ。

- 1 山けはしく、水清く、松青く、砂白し。
- 2 遠き慮なきものは、必ず近き憂あり。(論語)
- 3 都會は物價貴ければ、出費多く交際繁ければ、うるさきこと多し。
- 4 枇杷はうまけれど、種子大きく肉少なきは、飽かぬ心地す。
- 5 良書を繙けば、或はその識見の大なるに驚き、或はその品性の高きに感じ、嗚呼同じく人といふ、高く清く美しく偉なることかくの如きものあるかと、覺えず歎聲をもらすことあり。(坪内逍遙「讀書」)
- 6 冬の風は寒いが、夏の風は涼しく、春の月は近く見えるが、秋の月は遠くながめられる。(口)
- 7 日はかん／＼とはけしく照りつけて、まばゆくてたまらないが、空はどこまでも秋らしく澄んでゐた。(口)
- 8 近く明治神宮の拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く

大きく／＼し。××  
 如く此況の助動詞

形容詞の形

第十二章 形容詞の形附音便

形容詞には、未然連用終止連體已然の五形がある。

未然形

山高くば、眺めよからん。  
心正しくば、人に敬せられん。

連用形

山、高く聳ゆ。  
心を正しくもつ。

終止形

山、高し。  
心、正し。

鼻をうつて、神の新らしい宮居らしい一種のけ高い感じに打たれる。(口) (溝口白羊「明治神宮紀」)

連體形

高き山を越ゆ。  
心正しき人を敬す。

已然形

山高ければ眺望よし。  
心正しければ人に敬せらる。

活用	語幹例	未然			尾
	第一類	高	く	く	
第二類	正し	く	く	し	終止
		○	き	き	連體
			けれ	けれ	已然

○形容詞の未然形と連用形とは同形である。

○形容詞の連用形は、また中止の意に用ひる。「山高く、水深し。」「心正しく、情厚し。」の「高く」「正しく」は、即ち此の例である。

○第二類形容詞の終止形には語尾がなく、語幹そのままが終止形になる。

○形容詞の連體形は、時として次に來る體言を省略することがある。「善

形容詞と動詞ありとの結合

き人を賞し 惡しき人を罰す。の 善き 惡しき は、此の例である。

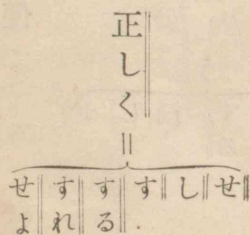
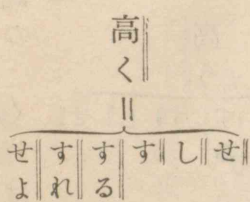
○形容詞には命令形がない。

形容詞の連用形は、動詞 あり と結合して、ら行變格活用となる。  
高く<sup>か</sup>あら 高く<sup>か</sup>あり 高く<sup>か</sup>ある 高く<sup>か</sup>あれ

正しく<sup>か</sup>あら 正しく<sup>か</sup>あり 正しく<sup>か</sup>ある 正しく<sup>か</sup>あれ

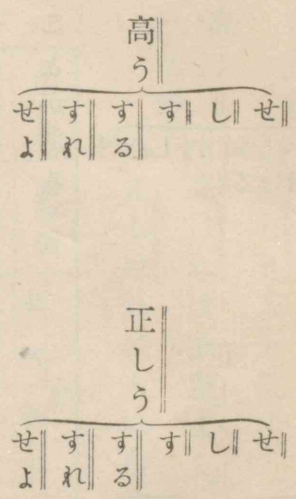
形容詞の連用形は、又、動詞 す と結びついて、ざ行變格活用となることがある。

形容詞と動詞すとの結合



形容詞のう音便

此の く は、又、う音便で う に轉ずることがある。



形容詞のい音便

形容詞連體形の語尾 き は、又、い音便で い に轉ずることがある。

善きかな。……善いかな。  
悲しきかな。……悲しいかな。

口語では、「山が高い。」<sup>終止</sup>「高い山。」<sup>連體</sup>「心が正しい。」<sup>終止</sup>「正しい心。」<sup>連體</sup>のやうに、終止連體の二形は同じ形になる。随つて、第一類第二類の區別

口語形容詞の形

が全くない。

語幹例	語				尾
	未然	連用	終止	連體	
高(文)	く	く	し	き	けれ
高(口)	く	く	い	い	けれ
正し(文)	く	く	〇	き	けれ
正し(口)	く	く	い	い	けれ

練習

次の文の誤を正せ。

- 1 任重ふして道遠し。(論語)
- 2 惜しひかな、中道にして歿せり。
- 3 人を笑ふて喜ぶはあし。
- 4 貴賓の來臨を辱ふす。

- 5 ひもじむるときにまづいものはない。(口)
- 6 よふこそお出で下さいまして有りがとう存じます。(口)
- 7 わるいことはせぬがよろしふございます。(口)

次の文から形容詞を擇び出し、且、その活用及び形を示せ。

- 1 道遠くば車にてゆくべく、近くば汽車にて行くべし。
- 2 人は交る道により、よきはあしきにうつるなり。

(昭憲皇太后御歌の一節)

- 3 遠からんものは音にも聞け、近からんものは目にも見よ。
- 4 世間は年中いそがしく、さわがしく、街路は朝に晩に雑沓す。都會が衛生上によろしからざるは明かなり。まして、火災などの害も都會に多かるをや。(坪内逍遙「都會と田舎」)
- 5 はでなる娛樂こそ田舎住居に乏しけれ、衛生上その他の危険なきは、その失を償うて餘あるべし。同上
- 6 初島わたり漕ぐ舟うたの寄る浪毎に聞ゆるもゆかしく、魚見が崎

のこなたより渚をつたうて、沙白く松青きあたり、濱千鳥のむれとぶもをかし。(高山樗牛「わが袖の記」)

7 櫻の花は空の青く水の清い日の本の風土に最もよく釣合つて、深山、市中どこにあつても皆よろしい。(口) (芳賀矢一「雪月花」)

8 よければよいとほめ、わるければわるいと戒めたとさねばならぬ。よくてもわるくても、平氣でうちやつておいてはならぬ。(口)

9 嘗て赤い土の露出してゐる上に鋭く尖つた切石が幾つもならんで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が森の中に長くつゞいてゐる。(口)

(溝口白羊「明治神宮紀」)

助動詞の種類

時の助動詞

過去

未來

完了

第十三章 助動詞の種類及び活用 その一

助動詞は重に動詞に添うて其の意味を助けるものであるけれども、又他の助動詞に添ふことがあり、稀には名詞・代名詞・助詞に添ふこともある。今其の意義によつて助動詞を時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・詠歎・希望・比説の十一種に大別する。

**時の助動詞** 動作の行はれる時を示すもので、これに過去・未來・完了の別がある。

過去の助動詞は、き けり の二語で、動作の今から前に起つたことを示し、未來の助動詞は、む の一語で、動作の今から後に起るべきことを示し、完了の助動詞は、つ ぬ たり り の四語で、動作の已に終つた意を示す。

*助詞(の、か)につく如し(比況)*  
*(体言に添へ)*  
*(受身形に)*  
*(指定の助動詞)*



か同(の、か)につづく知(比況)

進行的現在  
繼續的現在

過去…昨日大雪降り  
けり。けり。ける。けれ

未來…明日雪降らむ。  
む。め。

風、樹を僵しつ。  
て。つ。つる。つれ。てよ

完了雨止み  
ぬ。ぬる。ぬれ。ぬ

雨止めり。  
ら。り。る。れ

◎動詞の時は、過去、現在、未來の三つに分れ、これにそれ／＼完了の時を加へて六つとなる。而して現在の時は、別に動詞を用ひず、動詞そのまゝ、  
であらはされる。

◎たりりは、「花咲きたり。」我が宿に大雪降り。などのやうに用ひて、動作の繼續進行する意をあらはすことがある。之を進行的現在又は繼續的現在といふ。

◎水は低きに就く。「雨降つて地固まる。」のやうに眞理習慣等をあらは

恆の時  
極々時

打消の助動詞

すには、現在の形を用ひる。これを恆の時ともいふ。  
◎助動詞のむは、今ではんと發音し、從つて通例んと書く。

打消の助動詞

もの。

ず。ずぬね

花見に行かざりき。ざらざりざるざれ

じ。(活用せぬ)

花見に行くまじ。まじくまじまじきまじけれ

◎じまじは、推量して否定する意味である。

推量の助動詞

けむのやうに、事實を推量する意に用ひるもの。

らむ。らむらめ

らし。(活用せぬ)

受身の助動詞

雪降るべし。べくべしべきべけれ

べかりき。べからべかりべかるべけれ

めり。めりめるめれ

雪降らむ。むめ

まし。ましましか

雪降りけむ。(けむけめ)

◎けむは、過去の事實を推量する意味である。

◎今では、らむはらんむはんけむはんけんと發音し、

隨つて、通例らんけんと書く。

受身の助動詞

かけられる意を示すもの。

太郎、犬に噛まる。れるるるれれよ

次郎、馬に蹴らる。られらるらるれられよ

可能の助動詞

可能の助動詞

そのもの、力でなし得る意を示すもの。

一時間に三里は走らる。

(れ)るる、(る)れ

此の間には我も答へらる。

(られ)らる、(らる)れ

千引の岩もくたくべし。

(べく)べし、(べき)べけれ

美しさ名状すべからず。

(べから)べかり、(べかる)べかれ

○るるの活用は、受身の

るると同じで、べしべかり

の活用は、推量のべしべかりと同じである。

べしの用法

○べしは推量可能の外、「子は親に孝なるべし。」のやうに、當然の意に用ひることがある。「明日出頭すべし。」のやうに、命令の意に用ひることがある。又、「今後断じて復びせざるべし。」のやうに、断言の意に用ひることがある。

○るるは、「子の行末思はる。」母上の事のみ案ぜらる。」のやうに、

自發の助動詞

動作が自ら起つて止め難き意に用ひることがある。かやうな場合には、之を自發の助動詞といふ。

練習

次の文の中のべしの意味を説明せよ。

1 油盡くれば、火は消ゆべし。

2 風起らば、雨やむべし。

3 必ず參上仕るべし。

4 三尺の秋水、鐵をも断つべし。

5 講堂に參集すべし。

次の傍線ある語の意義用法を明かにせよ。

1 歩まば歩ま<sup>(た)れ</sup>しを、人に勧め<sup>(せ)られ</sup>て、已むを得ず車に乗れり。

2 捨て<sup>(た)れ</sup>し兒の心の中まで思ひやら<sup>(せ)られ</sup>てあはれなり。

次の文から既に學んだ助動詞を擇び出し、且、之を類別せよ。

1 若し忘らずして日に學に進まば何ぞ古人に及ばざるべき。

(室鳩巢「優游涵泳」)

2 いかになりたりけんその終を知らず。

3 親には孝をつくすべし。主人は大切にすべきものなり。人のものは取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。(橋南谿「藤樹先生」)

4 此の子利根こそ生れつきたらめなほ幼くしてその氣根のほども

はかりがたく家富めりとも見えねば黄金のこと心得られず。

(新井白石「折り焚く柴の記」)

5 冬に至りぬれば日短くなりて課もまだ満たざるに日暮れんとす

ること度々にて西向なる竹縁の上に机を持ち出でて書き終へぬる事もありき。(同上)

6 鐵は熱せられてなほ赤きうちに打つべし。枯草は太陽のかや

き居る間に乾かすべし。事は時機を失はずして始むべし。古より大人と呼ばれ豪傑と稱せられし人は大抵皆分陰を惜みて機會

をとらへし人なり。ブッシンクツ、ツ、ゼ、フロント

7 淺草の鳩も寂しく思ふらん日ごと見なれしわれを見ぬため。吉井 勇

8 野分して縣の宿はあれけり月見に來よと誰にいはまし。智茂真淵

9 小山田のをしねかるべくなりぬらん庭の薄もほにいでにけり。(明治天皇御製)

(明治天皇御製)

使役の助動詞

使役の助動詞

に動作をさせる意を示すもの。

次の例の **す** **さす** **しむ** のやうに、他のもの

第十四章 助動詞の種類及び活用その二

尊敬の助動詞

左官に壁を塗らす。  
(せ) す する すれ (せよ)  
しむ (しめ) しむ しむる しむれ (しめよ)  
大工に家を建てます。  
(させ) ます さする さすれ (させよ)  
しむ (しめ) しむ しむる しむれ (しめよ)

尊敬の助動詞

次の例の る らる す さす しむ のやう

に、他の動作を敬ふ意を示すもの。

兄上は、親類のうちに赴かる。

主人は、今朝旅行先より歸宅せらる。

皇子殿下には、學習院に御通學あらせらる。

皇太子殿下には、北海道に行啓せさせたまふ。

天皇陛下には、大觀艦式に臨ましましたまひき。

○ る らる の活用は、受身可能の る らる に同じで、せ させ

指定の助動詞

しめ の活用は、使役の せ させ しめ に同じである。  
○ 尊敬の せ させ しめ は、單獨に用ひることなく、通例尊敬の助動詞 らる 又は尊敬の動詞 たまふ と結合して用ひる。

指定の助動詞

次の例の なり たり のやうに、事物を指定する意を示すもの。

人は萬物の靈なり。  
(なら) なり なる なれ  
我は我たり。  
(たら) たり たる たれ

○ 指定の助動詞は名詞代名詞につづくのが常である。

○ 「運動もするなり」「それがよきなり」などのやうに、用言の連體形の下につくのは、其の間に名詞が略されたのである。

○ 指定の たり の活用は、完了の たり に同じであるが、意味は、全くちがふ。

詠歎の助動詞

詠歎の助動詞

次の例の なり けり のやうに、感動の意を示

希望の助動詞

すもの。

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。(なり なる なれ)  
あやしきものは心なりけり。(けり ける けれ)

◎指定の なり は名詞代名詞又は動詞形容詞の連體形か、受け詠歎の なり は動詞の終止形から受ける。

希望の助動詞

次の例の たし まほし のやうに、動作を爲したい、かくもありたいと望む意を示すもの。

花見に行きたし。(たく たし たき たけれ)

誰もかくあらまほし。(まほしく まほし まほしき まほしけれ)

比説の助動詞

次の例の ごとし のやうに、事物を比較説明する意に用ひるもの。

歲月は流るゝごとし。(ごとく ごとし ごとき)

比説の助動詞

◎ごとし は、風景畫圖のごとし。「有れども無きがごとし。」のやうに、助詞の が にも連る。

練習

次の文から助動詞を擇び出し、且その活用を示せ。

1 父は父たらずとも、子は子たらずべからず。(古文孝經孔安國の序)  
2 男のすなる日記といふものを女もして見んとてするなり。(紀貫之「土佐日記」)

3 旅行したきは山々なれど、父のゆるし給はぬを如何にかせん。

4 人の子たらずものは、重盛のその父に對するがごとくあらまほしきものなり。(み直体)

5 助けらるゝものならば、助けてやりたきものにこそ。(推定)

6 さこそ待るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀脇差腰にせんこと誠に不用のことにや。「といひしかば、のたまふところまことに然なり。」とて、傳へて習はしめたり。(指し) (新井白石「折

り焚く柴の記

7 天皇陛下には仁慈の御徳に富ませられ今回の震火災の慘狀を聞  
召していたく大御心を惱ましめたまひ内帑の金一千万圓を下し  
て罹災民を賑恤せさせられたり。  
① 指定は体言に接く。

第十五章 口語助動詞の種類及び活用

口語の助動詞は、文語の助動詞に比べると、その種類がやゝ少い。  
通常之を時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・希望の九種に分ける。

時の助動詞

よう とある。

昨日雪が降つた。 (過去) たら て た たれ  
丁度風が静まつた。 (完了) (同上)

口語時の助動詞

口語打消の助動詞

●この た が、が行な行ば行ま行の四段活用に續くときは、「急いだ」  
「死んだ」「飛んだ」止んだ「濟んだ」のやうに動詞の語尾は い 又  
は ん の音便となり、た は濁つて だ となる。  
やがて雨が止まう。 (未來) (活用せぬ)  
もうぢきに空が霽れよう。 (未來) (活用せぬ)

打消の助動詞

なかつ。

風は吹かない。 (ず) ぬ ぬ  
なかつた。 (な) かつ かつ

風は吹くまい。 (活用せぬ)

◎ まい は、推量して打消す助動詞で、文語の まじ にあたる。

◎ ぬ は、通例 ん と發音し、従つて ん とも書く。

口語推量の助動詞

推量の助動詞

次の う よう らしい のやうな語をいふ。

明日は、多分雪が降らう。(活用せぬ)

今頃は、定めしこちらの話をして居よう。(活用せぬ)

此の模様では、雪が降るらしい。(らしく らしい)

○う よう は、文語の む にあたり、らしい は、らし にあたる。

○文語 けむ の意は、口語では、たら う の二助動詞を連ねて之を

あらはす。

口語受身の助動詞

受身の助動詞

次の れる られる のやうな語をいふ。

猫が犬に追はれる。(れ れる れ、れよ)

太郎が馬に蹴られる。(られ られる られ、られよ)

○れる は、文語の る にあたり、られる は、らる にあたる。

口語可能の助動詞

可能の助動詞

次の れる られる のやうな語をいふ。

一日に十里は歩かれる。  
君の球は私にも受けられる。

○此の助動詞は、その形も活用も全く受身の助動詞と同じである。

●可能の れる られる は、四段活用の動詞と結びついて、次の例のやうに  
約まることがある。

歩かれる……歩ける 讀まれた……讀めた

口語使役の助動詞

使役の助動詞

次の せる させる のやうな語をいふ。

左官に壁を塗らせる。(せ せる せれ せよ)

大工に家を建てさせる。(させ させる させれ させよ)

○せる は文語の す にあたり、させる は さす にあたる。

○させる が、さ行變格の せ につくときは、せと さとが約  
まつて させる となる。  
かはゆい子には旅をさせさせる。



口語尊敬の助動詞

尊敬の助動詞

次の れる られる のやうな語をいふ。

父上はよく字を書かれる。

先生は親切に生徒を教へられる。

○ れる られる の活用は受身の れる られる と同じである。

○ られる が、さ行變格の せ につづくときには、せ と ら とが

さ と 約まつて、される となる。

叔父上は、毎朝散歩せられる。

此の類の助動詞に ます がある。

私は、剣道の稽古を致します。 (ませ まし ます) (まする)

君は、柔道の稽古をなさいますか。

この ます は動作の主に對する尊敬ではなくて、話の相手に對する敬意を示す。それゆゑ、對話の助動詞といふ。

對話の助動詞

口語指定の助動詞

指定の助動詞

次の だ です のやうな語をいふ。

私は彼を信じてゐるの だ。 だら で だつ だ です。 (でせ で でし です)

前途は有望 だ。 (同上) です。 (同上)

○ だ を ぢや や といふ 地方もある。

○ です は指定の對話語である。

希望の助動詞

次の たい たかつ のやうな語をいふ。

優勝旗を得たい。 (たく たい たけれ)

第一着になりたかつた。 (たから たかつ)

練習

次の文から助動詞を擇び出し、且、その種類と活用とを示せ。

一 雨がやんだから散歩に出かけようと思つてゐた だ。

- 2 雨は降るだらう。しかし、風は吹くまい。
- 3 言ひたいことは山々ございませうけれども、口不調法ですから、これ御免を蒙りませう。
- 4 苟も國運の發展をはからうとするには、國民が常に元氣をひきたて、倦まないやうに努めていかなければならぬ。
- 5 人をそしれば人にそしられ人を笑へば人に笑はれる。
- 6 長男は農學校を卒業させて實業に就かせ、次男は海軍兵學校に入られて海軍士官にした。
- 7 スタートがわるければ、途中でどう取返さうとしても、追いつかないものと考へられる。
- 8 燈火を中心とした此の病牀六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界の様に思はれた。
- 9 明治天皇の御製を拜すれば、王者の御風格が、大御心を通して、蒼穹

(高濱虚子「柿二つ」)

助動詞の形

第十六章 助動詞の形

助動詞にもまた未然連用終止連體已然(假定)命令の六形若しくはその中のいくつかの形がある。而してその活用の動詞に似たものは動詞に照して考へることが出來、形容詞に似たものは形容詞に照して考へることが出來る。今ぬたしせる(百)の三助動詞について之を畧説しよう。

雨霽れなば、見にゆかむ。

の如く、日輪の如く一天四海に輝きわたらせられる。歌柄といふ點からいへば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前に鞠躬如たらねばならぬ。(北原白秋「季節の窓」)

未然形

マツチを見に行きたくば、行け。  
今日一日は自由に遊ばせよう。(口)

右の な たく せ(口) は未然形である。

雨霽れにけり。

マツチを見に行きたくなりたり。

自由に遊ばせた。(口)

右の に たく せ(口) は連用形である。

雨霽れぬ。

マツチ見に行きたし。

自由に遊ばせる。(口)

右の ぬ たし せる(口) は終止形である。

雨の霽れぬるこそ嬉しけれ。

終止形

連用形

連體形

マツチ見に行きたき心は、余も友も同じ。

自由に遊ばせる時もあつてよい。(口)

右の ぬる たき せる は連體形である。

雨霽れぬれば、見にゆきぬ。

マツチ見に行きたければ、出で行きたり。

自由に遊ばせれば、喜ぶだらう。(口)

右のうち、文語の ぬれ たけれ は已然形で、せれ(口) は假

定形である。

雨霽れぬ。

自由に遊ばせよ。(口)

右の ね せよ(口) は命令形である。

◎形容詞に似た活用をなす助動詞には、命令形はない。

已然形  
假定形

命令形

なほ助動詞の各形については、別表を参照せよ。

練習

次の文から助動詞を擇び出し、且、その種類及び形を示せ。

1 知らぬことは、知らずと答ふべし。

2 暑氣にあてられて、病にかゝらせらる。

3 櫻咲きなば、つれだちて向島に遊ばんと、友にいひやりけり。

4 せめてはものを書き習はしめたくこそ侍れ。(新井白石「折焚く柴

の記)

5 秋のはじめになりぬれば、ことしもなかばは過ぎにけり。(慈鎮

6 金剛石もみがかずば、玉の光は添はざらん。(昭憲皇太后御歌の一節)

7 あづさ弓春になりなば、草の庵をとく訪ひてまし、逢ひたきものを。

(良寛)

8 今日平和克復の日なり。ヴェルサイユ宮附近の混雑は名状す

べからざるものありしが、大道は箒目正しく掃き清められて、一切

の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めざりき。(近衛文麿「歐米見

聞録)

9 たとひ己が欲せざることなりとも、その爲さざるべからざること

なる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へてわが爲すべき

事をなすはその人實に才氣あるのみならず、又實に徳量ある人な

りといふべし。(幸田露伴「伊能忠敬」)

10 日本の國旗は、この點から見ましても申分のない徽章だとおもひ

ます。どうか、此の國旗の精神を國民に普及させて、愛國心を鼓舞

し、日章旗の名譽を益々輝かしたいものであります。(口)

11 何といふ清い水だらう。月明りにも、水底の砂が分明に數へられ

る。此處は橋立明神の森か。若しくは銀河を今渡つてゐるので

はあるまいか。(口) (徳富健次郎「死の蔭に」)

12 選手は皆さうだらうと思はれるが、特に君の態度はまた僕を喜ば

せる。それは投げたと思ふ刹那、おれは今何をしたかといふこと

も忘れたやうな顔をしてゐる事だ。(口) (土岐善麿「スポーツの世界」)  
 13 私は二百五十萬市民を代表して、畏くも殿下に咫尺して此の有難  
 い思召を拜し、實に感激恐懼に堪へなかつた。更に又殿下のかく  
 も御立派な御態度を眼前に拜し奉つては實に何とも言はれぬ心  
 丈夫な、嬉しい、勿體ない氣分が胸に燃える心地がして、唯譯もなく  
 感涙が催されるのであつた。(口) (永田秀次郎「青嵐隨筆」)

### 第十七章 副詞の用法

副詞の用法

副詞は、動詞・形容詞に副うてその意味を限定する語であるが、時と  
 しては他の副詞に副うてその意味を限定することもある。

いと静かに物語る。(いと) は副詞 静かに を限定してゐる。  
 たいさうよく勵む。(口) (たいさう) は副詞 よく を限定してゐる。

副詞は又、語を隔て、動詞・形容詞等の意味を限定することがある。  
 頗る山水の景に富めり。(頗る) は動詞 富めり を限定してゐる。  
 少しも怒り恨んでゐる様子が無い。(口) (少しも) は形容詞 ない  
 を限定してゐる。

右の外、副詞は又、動詞・形容詞或は副詞の用を爲す語に副うてこれ  
 を限定することがある。

決して人を欺くべからず。(決して) は動詞の用をなす語 欺くべ  
 からず を限定してゐる。  
 たつた半日の道です。(口) (たつた) は形容詞の用をなす語 半日の  
 を限定してゐる。  
 纔に十秒の差にて敗れたり。(纔に) は副詞の用をなす語 十秒の  
 差にて を限定してゐる。

練習

次の文から副詞を擇び出し、且、その限定してゐる語を示せ。

1 日やがて暮れなんとするに、風益、涼しく、氣愈、清し。

(杉村廣太郎「田園の夏」)

2 我はしばらくこの地を去らんとして、かつて我が友よりあづかりたりし行李を、更に伯父なる人に預けたり。

3 恐るゝ神前に進みて、願はくは神慮を告げ給へと、しきりは稽首しぬ。

4 明治二十七八年の戦役正に終りて、臺灣の地我が有に歸したれども、凶賊なほその地に據り、險を恃みて、敢へて王師に抗せんとす。

(西村天囚「北白川の月影」)

5 ほとゝと折々たくく水鶏の聲いとあはれに聞ゆ。

6 小生病氣の節は、度々御尋ね下され、誠に有難く存じ奉り候。近頃漸く全快いたし候間、何卒御安心下されたく候。

感動句

ハヤ、リ

7 つと汲まれたる山櫻、たゞ白妙に一めぐりめぐると見れば、うちつづきのぼる椿のくれなゐや。(尾上柴舟「水車」)

8 明日ぜひお目にかゝりたい事がございますから、御迷惑ながら、どうぞ御在宅下さいますやうくれぐれもお願ひ申します。(口)

9 たまゝ一方を突き破つて山頂に達したかと思へば、忽ち他の砲臺から十字火を浴せかけますので、逆もたまちきれません。

(口) (櫻井忠温「肉弾」)

10 もう網の中は、さつきから、鱈や鯖の青光り、白光りがばたばたはねてゐます。いやもう盛なことです。(口) (徳富健次郎「新春」)

11 窓の下の山吹にもちらちらと枝の深い方で黄色く綻びる花も見え出した。南天の實も、いよゝと紅く濕つて見え出した。つい前の隣の小藪には、實は新鮮な蒲公英が、數かぎりなく、朝毎に咲いては、また寺の子たちに摘まれてしまつた。(口) (北原白秋「季節の窓」)

### 第十八章 接續詞の種類及び用法

接續詞はその意味の上から、之を次の四つに分ける。

#### 並列・累加の接續詞

又 且 尚 及び 況や まして(以上、文口) その上 さうして  
そして それに それから(以上口) など。

◎又 尚 は、副詞の接續詞に轉じたもの、及び は、動詞の接續詞に轉じたものである。

#### 選擇の接續詞

又は 或は 若しくは(以上、文口) それとも(口) など。

#### 反意の接續詞

されども 然れども(以上、文) 但し 併し 尤も 處 併しな

並列・累加の接續詞

選擇の接續詞

反意の接續詞

原因・理由の接續詞

から さりながら(以上、文口) けれども ところが(以上、口) など。

◎處 は、名詞が接續詞に轉じたものである。

#### 原因理由の接續詞

然れば 然らば されば さらば 故に 隨ひて 因りて  
間(以上、文) それゆゑ それで(略して) ①それなら さうすると  
(略して) ②そこで(以上、口) など。

◎間 は、名詞が接續詞に轉じたものである。

#### 練習

次の文から接續詞を選び出せ。

この山、月によろしく且雪によろし。されど、一株の花木だになし。  
まことに惜むべきことなり。

2 明日南又は東の風。但し驟雨の兆あり。

3 本日出席仕るべき筈の處、昨夜よりひきこもり居り候間、缺席仕る

べく候。悪しからず御思召下さるべく候。

4 と見れば、船の後部は已に半ば沈みて、速力著しく減じたり。而も煙突よりは盛に黒煙を吐きて、尙も死地に向ひて急ぎつゝあり。

嗚呼、乗員は人か並立は神か。眞に是、日本魂の精なりけり。

5 明朝或は明晩は御尋ね申し上げようと思つてゐます。もつとも雨天でしたら、失禮いたすかも知れません。(口)

6 彼は知つて行つたかそれとも知らないで行つたか。知つて行つたとすれば憎むべきだがしかし知らないで行つたとすれば、強ひて咎めずともよからう。(口)

7 成程、先づ武器を完全に致すことは當今の急務でもござらう。が、いざ實戦となると、何よりも大切なのはめい／＼氣魄膽力次いで實技の熟練でござる。突然に事が生じた場合、魂が顛倒するやうでは、いかな利器も用をなしません。そこで變に處してあわてぬ稽古が必要でござる。だから拙者はその稽古として、毎々山狩

を皆にさせてゐるものでござる。(口) (坪内逍遙「我がベージェント劇」)  
次の——の處に適當な接續詞を補へ。

1 米・麥・豆・粟——黍を五穀といふ。

2 秋になりぬ。——殘暑未だ去らず。

3 余は學問——藝術にて身を立てんと欲す。

4 あの人は善人です。——學問はあまりありません。(口)

5 人の一生は長からざるにあらず。——その運命は少年時代の勤惰によりて定まる。

6 徳川光圀は地の利をつくす術に心を用ひ、山に漆——楮を多く植ゑ、野に馬を放ちて牧となせり。——海には海草白魚——昆布をまき——蛤を放てり。これより常陸の地に多くの海産物出づるに至れり。



感動詞の種類  
及び用法

文の首につく  
感動詞

文の末につく  
感動詞の補助詞

### 第十九章 感動詞の種類及び用法

感動詞には、「あゝ悲し」の あゝ のやうに、文の首に附くものと、「美なるかな」の かな のやうに、文の末に附くものとある。

#### 文の首につくもの

あゝ	あな	あはれ	いざ	いで	すは	やよ(以上、文)	あら
あれ	いゝえ	いえ	いえ	おゝ	おや	こら	これ
さあ	さて	そら	それ	どれ	なに	なあに	はい
やあ	やれ(以上、口)	など。					まあ

#### 文の末につくもの

やゝあなかなしや  
よゝすは、火事よ。

やゝ 吾妻はや。

時はは強き

もあはれかなしも。

なわが身悲しな。

かな賢なるかな。古近集

かもかなしきかも。萬葉集

がなわかれのなくもがな。

ばや花見に行かばや。希望の助詞(自己の動作)

かし勉強せよかし。(以上、文)

よそら大變ですよ。

などうも奇麗ですな。

ねようお出で下さいましたね。

ぜなまけてばかりゐてはこまりますぜ。

ぞ…そんなことではいけませんぞ。(以上、口)  
右の外、此の類に屬するものは、少くない。

練習

次の文から感動詞を擇び出せ。

- 1 あつばれいさましき武者ぶりがな。
- 2 しをらしい毛利が少年等よいでや、目にもの見せてくれうず。
- 3 八道の山よ、いざさらば、國の譽と戦ひて花と散りにし日の本の男  
兒の骨をまもれよや。(天町桂月「八道の山」)
- 4 やよや待て、山ほとゝぎすことづてん、われ世の中にすみわびぬと  
よ。(古今集)
- 5 あはれ、手の中の玉とめでいつくしめる子を失ひし母の心はよ。
- 6 あな、おもしろの春雨や、花を散らさぬほどに降れ。
- 7 おや、懷中時計が五分進んでゐるぞ。(口)

オイ

アハレ

8 さあ、一點占めたぞ。おい、君。優勝旗はもうこつちのものだなあ。(口)

第二十章 助詞の種類及び用法

助詞は、その添はる語の種類によつて、次の三類に分ける。

名詞代名詞に添はる助詞

體言に添はる  
助詞

兄の帽子。	米のなる木。	我が庭。
花を觀る。	山に登る。	前へ進め。
山と川と。	友人と遊ぶ。	歐洲より歸る。
花より團子。	神戸まで見送る。	ペンにて書く。
ののがをにへとよりまでにて		などである。

而して前ののは所有の關係を示し、後ののは動作情態の

主を示し、がは所有の關係を示し、をは動作の目的を示し、  
 には場所を示し、へは方向を示し、前のとは事物の並列  
 を示し、後のとは共同の意を示し、前のよりは起點を示し、  
 後のよりは比較の標準を示し、までは到着點を示し、に  
 ては方便を示す。  
 口語では起點を示す文語のよりはからとなり、方便を示  
 すにて(熟語)はでとなる。並列を示すとは最後の  
 を省く。

歐洲から歸る。ペンで書く。山と川。

種々の語に添  
 はる助詞

種々の語に添はる助詞

墨は黒し。  
 學も徳も高し。

行をば慎む。  
 月をぞ愛づる。  
なむ

月をこそ愛づれ。  
 ありやなしや。

必ずしも然らず。  
 あるかなきか。

水だにあらばよかりしを。

禽獸すら恩を知る。

暴風さへ加はる。

粥のみばかりする。

泣くな笑ふな。

な泣きそな笑ひそ。

の は ば も ぞ なむ こそ し や か だに すら  
 さへ のみ ばかり な な そ などである。而して、は  
 ばは特にある事物をひき出していふに用ひ、もは事物の一  
 致をいふに用ひ、ぞなむこそしは特に上の語をさして  
 いふに用ひ、やかは疑ひ又は問ふ意に用ひ、だにすら  
 は重きを措いて輕きを示す意に用ひ、さへは、あるが上になほ

物の添ひ加はる意に用ひ、のみばかりはそれと限る意に用ひ、ななそは禁止の意に用ひる。

文語のやは口語ではかとなり、だにはでもとなり、すらはさへとなり、さへはまでとなり、なそはなとなり、のみはばかりとなる。

あるかなか。

水でもあればよかつたに。

禽獸でさへ恩を知つてゐる。

暴風までが加はる。

粥ばかりすする。

泣くな笑ふな。

◎はばもか等は、口語と文語と同じである。

活用する語に添はる助詞

動詞形容詞助動詞に添はる助詞

◎ぞ なむ し は、之に相當する口語がない 但しこそは、稀に口語にも用ひられる。

◎なむ は なん と發音し、従つて なん と書く。

乞はば與へん。

乞へば與ふ。

乞へども與へず。

乞ふとも與へじ。

梅は咲けるに、鶯は未だ來鳴かず。

雪は降りしが、風は吹かざりき。

歩みつゝながら語る。

何事もなさて、日を暮す。

の ば ども ども とも にも を が つゝ ながら て な  
どである。而して前の ば は仮定の条件、後の ば は確定の  
条件で、共に順當な接續の意を示し、ども ども は確定の条件、  
とも は仮定の条件で、共に不順當な接續の意を示し、に を  
が は反對になる意を示し、つゝ ながら は動作の同時に起  
ることを示し、て は打消の意を示す。

以上文語の助詞の中、確定の ば は、口語では ので から と  
なり、假定の とも は、ても となり、を は に となり、  
つゝ は ながら となり、て は ないで 又は ずに と

なる。

乞ふのでから與へる。

乞うても與へまい。

梅は咲いてゐるのに、鶯はまだ來て鳴かぬ。

あるきながら語る。

何事もしないでせずに日を暮す。

此の他は、口語も概ね文語と同じである。

練習

次の文に含まれてゐる助詞を示せ。

1 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりてこけのむす  
まで。

2 君がため花と散りにしますらをに見せばやとおもふ御代の春かな。(加納諸平)

3 急がずばぬれざらましを、旅人のあとよりはるゝ野路の村雨。(太田道灌)

(太田道灌)

4 庭の雪は犬の足跡より消えそめて、野も山もやがて元の姿となる。

5 梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟をひらき、片手に

て團扇を持ちながら、一片を口にしたる、氷にもまさりてすがすがしく

しうこそ。(正岡子規「果物」)

6 人の一生は、重き荷を負ひて遠き路をゆくがごとし。急ぐべから

ず。不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば、困窮したる

時を思ひおこすべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つ

ことばかりを知つて負くることを知らざれば、害その身にいたる。

おのれを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるよりまされ

り。(傳徳川家康家訓)

7 一天萬乗の大君におはしましなから、禿びたる御筆をお用ひになり、破れたる敷皮をお下げにならぬといふのは、いかなる思召でございませうか、皆これ、節すべきことを節して有用の事はのみ御用ひ遊ばすといふ大御心に、外ならぬ事と存じます。

(笠井信一「明治天皇の御遺物」)

8 彼の千古の雪をいたゞいて、東海の天にそり立つけ高い富士山の姿をあふぎみて、あゝ貴いといふ感情を起さないものは、日本人は勿論、外國人にも恐らくは無いであらう。この貴い富士の高嶺こそ、實に大日本帝國の姿である。

# 中學日本文典卷上終

明治四十四年四月二十三日發行  
 明治四十五年五月十四日發行  
 明治四十六年六月二十日發行  
 明治四十七年七月二十日發行  
 明治四十八年八月二十日發行  
 明治四十九年九月二十日發行  
 明治五十年十月二十日發行  
 明治五十一年十一月二十日發行  
 明治五十二年十二月二十日發行  
 昭和二年一月二十日發行  
 昭和三年二月二十日發行  
 昭和四年三月二十日發行  
 昭和五年四月二十日發行  
 昭和六年五月二十日發行  
 昭和七年六月二十日發行  
 昭和八年七月二十日發行  
 昭和九年八月二十日發行  
 昭和十年九月二十日發行  
 昭和十一年十月二十日發行  
 昭和十二年十一月二十日發行  
 昭和十三年十二月二十日發行  
 昭和十四年一月二十日發行  
 昭和十五年二月二十日發行  
 昭和十六年三月二十日發行  
 昭和十七年四月二十日發行  
 昭和十八年五月二十日發行  
 昭和十九年六月二十日發行  
 昭和二十年七月二十日發行  
 昭和二十一年八月二十日發行  
 昭和二十二年九月二十日發行  
 昭和二十三年十月二十日發行  
 昭和二十四年十一月二十日發行  
 昭和二十五年十二月二十日發行  
 昭和二十六年一月二十日發行  
 昭和二十七年二月二十日發行  
 昭和二十八年三月二十日發行  
 昭和二十九年四月二十日發行  
 昭和三十年五月二十日發行  
 昭和三十一年六月二十日發行  
 昭和三十二年七月二十日發行  
 昭和三十三年八月二十日發行  
 昭和三十四年九月二十日發行  
 昭和三十五年十月二十日發行  
 昭和三十六年十一月二十日發行  
 昭和三十七年十二月二十日發行  
 昭和三十八年一月二十日發行  
 昭和三十九年二月二十日發行  
 昭和四十年三月二十日發行  
 昭和四十一年四月二十日發行  
 昭和四十二年五月二十日發行  
 昭和四十三年六月二十日發行  
 昭和四十四年七月二十日發行  
 昭和四十五年八月二十日發行  
 昭和四十六年九月二十日發行  
 昭和四十七年十月二十日發行  
 昭和四十八年十一月二十日發行  
 昭和四十九年十二月二十日發行  
 昭和五十年一月二十日發行  
 昭和五十一年二月二十日發行  
 昭和五十二年三月二十日發行  
 昭和五十三年四月二十日發行  
 昭和五十四年五月二十日發行  
 昭和五十五年六月二十日發行  
 昭和五十六年七月二十日發行  
 昭和五十七年八月二十日發行  
 昭和五十八年九月二十日發行  
 昭和五十九年十月二十日發行  
 昭和六十年十一月二十日發行  
 昭和六十一年十二月二十日發行  
 昭和六十二年一月二十日發行  
 昭和六十三年二月二十日發行  
 昭和六十三年三月二十日發行  
 昭和六十三年四月二十日發行  
 昭和六十三年五月二十日發行  
 昭和六十三年六月二十日發行  
 昭和六十三年七月二十日發行  
 昭和六十三年八月二十日發行  
 昭和六十三年九月二十日發行  
 昭和六十三年十月二十日發行  
 昭和六十三年十一月二十日發行  
 昭和六十三年十二月二十日發行  
 昭和六十三年一月二十日發行  
 昭和六十三年二月二十日發行  
 昭和六十三年三月二十日發行  
 昭和六十三年四月二十日發行  
 昭和六十三年五月二十日發行  
 昭和六十三年六月二十日發行  
 昭和六十三年七月二十日發行  
 昭和六十三年八月二十日發行  
 昭和六十三年九月二十日發行  
 昭和六十三年十月二十日發行  
 昭和六十三年十一月二十日發行  
 昭和六十三年十二月二十日發行

卷上	定價	五圓
卷下	定價	五圓
全	定價	十圓
卷上	臨時定價	五圓
卷下	臨時定價	五圓
全	臨時定價	十圓

中學日本文典 卷上



著者 吉田 彌平  
 發行所 光風館書店  
 印刷者 兼 上原才一郎

東京市小石川區高田老松町五十二番地  
 東京市神田區通神保町六番地  
 東京市神田區通神保町六番地  
 (電話) 神田三〇八七番  
 (振替口座) 東京三二七番

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候は、直に御送附可致候

紅毛丹... 瓜... 瓜... 瓜...  
瓜... 瓜... 瓜... 瓜...  
瓜... 瓜... 瓜... 瓜...  
瓜... 瓜... 瓜... 瓜...

層。  
死。恨。現。代。文。字。は。四。段。に。使。用。す。る。事。と。許。す。



級  
第十九  
級  
第三十三學  
昭  
昭  
昭  
昭  
昭  
昭  
昭  
昭

94

吳市所  
西畑

級  
田中昭



前田  
三九  
級  
級  
級

広島大学図書

2000038378



庫  
27  
378